

# エリウゲナにおけるテオファニアの思想

今 義 博

## I

エリウゲナによれば神は一方では隠れたまま自らに止留し (manere), それゆえいかなる被造的本性も神をそれ自体としては決して捉えることができないが, しかし他方では「永遠の光」たる神は「聖書と被造物とによって二通りの仕方自分自身を世に明らかにしている」<sup>1)</sup>. そして聖書と世界とを通しての神の自己開示だけが知りえぬ神を我々が知りうる根拠なのである。

エリウゲナにおいて神の自己開示は「テオファニア」(θεοφάνεια, theophania) つまり「神の顕現」(apparitio dei, diuina manifestatio, manifestatio dei) と呼ばれるが, その概念は多様な意味を持ち<sup>2)</sup>, 彼の著作ではさまざまな問題連関で散発的に表明されている。しかしそれにもかかわらずテオファニアの思想は明瞭かつ整然とした体系を成していることが認められる。本論では世界あるいは全被造物がテオファニアであるとする思想について若干論究してみたい。

## II

エリウゲナによれば, 天使たちや預言者たちや選ばれた人々であれ, すべての被造的本性にとって神はそれ自体として現れることは決してない。テオファニアとはどのような形であれ現れることのない神の本性が被造物において現れることあるいは被造物として現れたもののことである<sup>3)</sup>。神が現れる場合, 神は被造物においてしかあるいは被造物としてしか現れない。

神は我々に隠れていながら現れる。テオフィニアは現象せざる神の現象である。それは「現れないものの現れ、隠れたものの顕現」(non apparentis apparitio, occulti manifestatio)<sup>4)</sup>である。神の隠れと現れとは我々にとっては矛盾であるが、神自身はその矛盾を超えてそれを成立せしめていると考えられるがゆえに、テオフィニアは弁証法的な問題なのである<sup>5)</sup>。テオフィニアが展開する構造とテオフィニアを思惟し認識する方法論の一般的な基礎はエリウゲナが偽ディオニュシオス・アレオパギテスから継承した肯定神学と否定神学の弁証法である。

肯定神学も否定神学も、万物が神により創造されたという思想に基づいて万物の存在の可能根拠を経験的には知りえない神に求めようとする超越論的方法である。いずれも被造物との関係において神を理解しようとするのであるが、肯定神学は神を被造物に積極的に関係づけ、被造的属性によって神を把握する。つまり神を被造性によって限定し、その最高段階では最高の被造的諸属性を神に付与することで神を理解する。しかし神はあらゆる被造性を絶対的に超えているから、いかに高度であれあらゆる被造的限定の彼方にある。従って、肯定神学は確かに有意味であるが、その有効性には限界がある。

それに対して否定神学は被造性の彼方にある神そのものの固有性を浮かび上がらせるために神に対する被造的関係づけを否定する。それは肯定神学が神に付与したあらゆる被造性を除去して、神を肯定神学の彼方に否定的に指し示す。それゆえ否定神学は肯定神学以上に神に接近する道である。「神は神について述べられるもののうちの何かであると肯定されるよりは、それらのうちのどれでもない」と否定されるほうがより真なのである<sup>6)</sup>。

エリウゲナの否定神学は存在論的視角から神をあらゆる被造的な存在と非存在とを超えるものとして「無」(nihil; nihilum)<sup>7)</sup>と呼ぶ。言うまでもないが、これは神の実在性を否定しているのではなく、神の存在がその卓越性によってあらゆる被造的な限定や規定を超絶していること、つまり神の「超存在(本質)性」(superessentialitas)を表明しているのである。「卓越せる無」(nihil per excellentiam; per excellentiam nihilum)<sup>8)</sup>たる神は被造的な存在と非存在

のすべてを超えてそれらを自らにおいて根拠づけている。

神的「無」は「無限なる無」(nihil per infinitum)<sup>9)</sup>とも呼ばれる。神は被造的な有限性と無限性を超えてそれらを根拠づける無限性として「無限以上の無限」(infinitum plus quam infinitum)あるいは「無限なるものどもの無限性」(infinitas infinitorum)であるからである<sup>10)</sup>。それゆえ神の無限性は被造的な有限性や無限性と対比可能でも対他的でもなく、かえってそれらを自らにおいて成立せしめるものである。

まさにそのように神は「対立するものの対立性」(oppositorum oppositio)<sup>11)</sup>として存在と非存在との、有限性と無限性との、そして同様に肯定神学と否定神学との対立を弁証法的に統一する<sup>12)</sup>。かくて万物のうちの何ものでもないものとしての否定神学的な「万物の無」(nihil omnium)と全被造物が神の有の分有であることとしての肯定神学的な「万物の有」(essentia omnium)とが同じ神を指すことが可能なのである。

### III

エリウゲナは「万物の原因」(causa omnium)としての神を「創造するが創造されない自然」と規定している<sup>13)</sup>。神は万物の創造者であり、何ものによっても創造されない。しかし教父たちには「神の本性は造りかつ造られ、創造しかつ創造される」(facit et fit, et creat et creatur)という言葉があり<sup>14)</sup>、また聖句にも「彼〔キリスト〕は私たちのために神によって知恵、正義、聖、贖いとして造られた(factus est)」<sup>15)</sup>(1コリ1:30)とある。エリウゲナにとって確かに「神が造られると言われるとき、それは明らかに一種の比喩表現である」<sup>16)</sup>が、それにしてもどのようにしてそれらの証言は創造者としての神と矛盾なく理解されるのか。彼は神があらゆる対立や矛盾を超えてそれらを根拠づけるという洞察に基づいて「創造」そのものの意味を考察することによって神の創造性と被造性の矛盾の解決を試みる<sup>17)</sup>。

「神」すなわちラテン語のdeusの語源は一説によればギリシャ語のθεῶν(見る)である。この説に基づけば神は「見る者」(uidens)であり、神が創造す

ることは見ることにほかならない。だが、創造においては「自分自身のほかには何もないのだから、神は自分自身のほかにも見ない」<sup>18)</sup>。従って万物の創造とは神が自分自身を創造することにはかならない。

またほかの語源解釈によれば deus はギリシャ語の *θεωρῶ* (走る) に由来する。これによれば神は「走る者」(currens) と理解される。この場合、創造とは万物が存在するように神が万物を貫いて走る運動である。しかし本来、神には被造的意味での静止も運動もない。むしろ「神は静なる動であり、動なる静である。」(motus satabilis et status mobilis)<sup>19)</sup>つまり神の運動は自分自身において不変に静止したままでの運動である。神に自分の「外」(extra)はないから、「神は自分の外へ動くのではなく、自分自身から自分自身において自分自身へ動く」<sup>20)</sup>。しかも「この運動は万物を創造しようという神の意志の志向にはかならない」<sup>21)</sup>。それゆえ神の絶対的同一性に基づいて、神の本性においては神が創造しようとする意志することは、存在するように神が意志したものが存在することと同一である。創造においては神の意志のほかには何も存在しないのだから、神の意志にはかならない神の本性がすべてのものにおいて創造されると言われうる。「すべては神のうちにあり、神の外には何もない」<sup>22)</sup>。

「神の意志は、存在するようにと非存在から存在へ無から導いてすべてのものを創造する。しかしその神の意志のほかにはいかなるものも本質(存在, *essentia*)として存在していないのだから、神の意志が創造されるのであり、実に神の意志が万物の本質(存在)なのである」<sup>23)</sup>。

こうして神による万物の創造とは神の自己創造にはかならない。エリウゲナのこの解釈は主として偽ディオニュシオスに基づくものである。両者とも神は万物において創造されると主張するが、それは万物が神であることを意味していない<sup>24)</sup>。それどころか両者とも万物が神でないことを頻繁かつ明確に主張している。神が万物において創造されるということは、神が万物に存在を分与することを、裏返せば万物が神的存在を分有することを意味しているのにはかならない。例えば上の引用に続いても次のように説明されている。

「ちょうど神の意志のほかにはいかなる本性的な善もなく、善であると言わ

れるすべてのものは唯一最高の善の分有によって善であるのと同様に、実在している (existere) とされるすべてのものはそれ自体において実在しているのではなく、真に実在している本性の分有によって実在しているのである」<sup>25)</sup>。

それゆえ神の万物の創造が神の本性の自己創造であるということは、神が「無」から「万物の原因」として自らを展開して万物に存在を分与すること<sup>26)</sup>、あるいは神が被造物の存立の基盤を創立することとしての「存在付与」(substitutio) にほかならない<sup>27)</sup>。

すでにアウグスティヌスに胚胎されていた「無からの創造」の思想<sup>28)</sup>はかくてエリウゲナにおいて無なる神が自ら他者たる被造物の存在の原因として被造物的存在をもたらすという意味で定式化される。

「神は無から万物を造る。神は自分の超存在性から存在を、自分の超生命から生命を、自分の超知性から知性を、存在するものと存在しないものすべての否定から存在するものと存在しないものすべての肯定を生み出す」<sup>29)</sup>。

かくて神は創造において「万物の有 (本質)」となり、万物に内在する<sup>30)</sup>。

#### IV

以上の神についての無の有化、超越の内在化、否定の肯定などは神の隠れと現れの関係を示している。エリウゲナにとって神の万物の創造は自己創造としての神の万物への顕現、テオフィニアである<sup>31)</sup>。しかし世界の事々物々が神の創造物だということは、あるいはそれが神の自己創造だということは、あるいは超存在的無なる神がそこに内在しているということは、隠れている神がそこに現れているということは、いったいどのようにして知られるのか。これらの問題はエリウゲナにおいては「神に属する目に見えない事物は、造られたものを通して理解することで知ることができる」(inuisibilia enim eius per ea quae facta sunt intellecta conspiciuntur. ロマ 1:20) というパウロの言葉をどう解釈するかという問題と分かち難く結びついているが、それは畢竟、我々は見

えない神をいかにして被造物において観るのかという問題である。それについてエリウゲナは証聖者マクシモスの思想を踏まえて次のように述べている。

「使徒がキリストについて『彼はわたしたちのために神によって知恵、義、聖、あがないとして造られた』と語っているように、信仰と希望と愛とそのほかの徳によって造り直される人々において不思議で言い表し難い仕方  
で神の御言葉が生まれるとき、神の本性が造られると言われるだけでなく、それ自体としては見えないのに、存在するすべてのものにおいて現れるのだから、それが造られると言われるのも不適當なことではない」<sup>32)</sup>。

テオフアニアは外部に客観的に観察される現象ではなく、我々の内面に神の御言葉が生まれるときに生じる現象である。万物をテオフアニアと観ることは神の本性が万物において創造されることを理解することと同一のことである。そのようなテオフアニアはどのようにして生起するのか<sup>33)</sup>。エリウゲナはこの問題を「私は人間の行う探求でそれよりも深いものを知らない」と述懐しつつ、マクシモスとアウグスティヌスとに依拠してその解明を試みている。まず、エリウゲナによればこの問題に関するマクシモスの見解は次のようなものである。

「テオフアニアは神以外のものから惹き起こされるのではなく、神の御言葉つまり父の知恵である独り子がいわば下の方へ向かって、御言葉によって造られ浄められた人間本性の方へ下降することと、人間本性が上の方へ向かって、先に語り出されている御言葉の方へ神の愛を通して上昇することとから生じるのである」<sup>34)</sup>。

ここで「テオフアニアは神以外のものから惹き起こされるのではない」と言われるのは、テオフアニアが神の知恵の人間本性への下降（*condescensio*; *descensio*）<sup>35)</sup>と人間本性の神の知恵への上昇（*exaltatio*; *ascensio*）とから生じるとき、神の下降は神からの「恵み」（*gratia*; *misericordia*）により、また人間の上昇は神からの「愛」（*dilectio*; *amor*; *caritas*）によるからである。

次に、エリウゲナによればアウグスティヌスがテオフアニアの生成に関して考えるとところは次のようなものである<sup>36)</sup>。

「万物は父の知恵においてそれによって造られたのであるが、知恵自身は

造られず造るものであって、ある言い表し難い憐れみ深い下降によって私たちの魂のなかに造られて [fit (生じて)], 私たちの知性を自分に結びつけるのである。その結果、自分自身から私たちの方へ下降して私たちのうちに住む知恵と、愛を通して知恵によって知恵へ引き上げられ知恵において形成された私たちの知性とから、ある言い表し難い仕方ではいわば合成された知恵が造られる [fiat (生じる)] のである<sup>37)</sup>。

マクシモスにおいて示された神の下降と人間本性の上昇の事態はこのアウグスティヌス解釈において「いわば合成された知恵 (composita sapientia)」として示されている。言い換えればテオフィニアは「神の知恵と私たちの理解との不思議な言い表しがたい合致 (conformatio) から生じる」<sup>38)</sup> のである。

当然のことだが正義その他の徳もテオフィニアであり<sup>39)</sup>、従って徳も同様に神の知恵と人間の知性ととの合致から生じるのである。

「人間の知性が愛によって上昇すればするだけ神の知恵は憐れみによって下降してくるのであり、それこそがすべての徳の原因であり実体である。

このようにすべてのテオフィニアすなわちすべての徳は自分の外にはなく自分のうちに神と自分自身とから実現するのである」<sup>40)</sup>。

神によってテオフィニアが人間のうちに生じる条件は神による人間本性の「照明、浄化、完成」であるが、それは将来の生において神の至福の完成を享ける人々に実現するであろうのみならず、この世の生においてもそのように形成されるに値する人々においていますでに始まっているのである<sup>41)</sup>。エリウゲナにとってテオフィニアは現実的な事柄なのである。

## V

テオフィニアとはあらゆる被造物を超越する神の被造物への内在化であるが、その内在化は被造物に応じてヒエラルキーをなす。

「神の善性は存在するものへのある言い表し難い下降を通して精神の目で見られる場合にただそれだけが万物において存在しているのが見いだされるのであり、それは存在しており、存在したし、存在するであろう。それ

ゆえ、それが捉えられないと理解される限りではそれは卓越性により「無」と呼ばれるのは不適切なことではないが、しかしそれがそのテオフィニアに現れ始める場合にはいわば無から或るものへ発出する (procedere) と言われる。それは本来的にすべての存在を超えていると考えられるが、本来的にすべての存在において認識されもする。それゆえ目に見える被造物も目に見えない被造物もすべてがテオフィニアつまり神の現れと呼ばれるのである<sup>42)</sup>。

神は万物において創造されると同時に、創造されずに万物を超越している。テオフィニアにおいて有を超えている神が無に留まりつつ有として現れる。それは「現れないものの現れ、隠れたものの顕現」である。無は有へ現れつつも依然としてその現れの背後に隠れている。被造物つまりテオフィニアは神そのものでも神の変形物でもない。万物は神が現象する場であり、神の現象そのものであるが、神は自らの現象において隠れている。

テオフィニアにおける神の顕現と潜隠という事態は人間の知性による表現に喩えて理解される。知性もそれ自体としては目に見えず捉えることができないが、音や文字やそのほかの記号などに表されるならば、それらのしるしによって知性は明らかに把握されるようになる。このように知性が外的に明示されるとしても、知性自体は常に外には見えないままである。

「知性は黙っているとともに叫んでいる。それは黙っていながら叫び、叫びながら黙っている。それは見えないままで見られる。それは見られていながらも見ることができない。それは包括されないままで包括される。それが限定されるときも、それは限定されないままである。それは望みのままに音や文字に具体化されるが、具体化されるときもそれ自身において体をなさぬまま存在している。それが他者の感覚まで乗って行き、いわばある種の乗物を空気という材料や可感的な素材から自分のために作ってその外部感覚に到達するや否や、それは乗物を捨てて、自分自身で完全にひとり心の内奥にまで入り、他者の知性と交わり、結合してその知性と一つになる。しかもそれを達成するときも、それは常に自分自身に留まって



いる。それが動くときもそれは静止したままであり、静止しているときも動いている。なぜならそれは静なる動であり、動なる静であるから。それが他のものと結合するときも、それは自分の単純さを失わない」<sup>43)</sup>。

蛇足すれば、それは我々がセザンヌの絵において至る所に彼を見いだしながら、そのどこにも彼はいないようなものである。

## VI

世界は神の存在を分有するものとして神を指し示す「神のメタファー」(diuina metaphora)<sup>44)</sup>である。諸事物はそれぞれが神性を分有する程度に応じてその神性の表現である。

「自分固有の有り方<sup>45)</sup>に応じて最高善を分有していない被造物は何もないということを我々は理解する必要がある。実際、聖書は次のように述べている。『神は御覧になった。見よ、すべてのものは極めてよかった』(創1:31)もしそうであるならば、万物は最高善を分有しているのであるから、人間の精神が低い善の像から崇高なものの認識にまで上昇できるようにするために、物質的諸事物を可知的なものを考察するきっかけとすることは何も奇妙なことではない」<sup>46)</sup>。

最下底の存在である可感的被造物は「最も遠い神の本性の痕跡」<sup>47)</sup>とはいえ神を見いだす十分な手がかりである。使徒パウロは父なる神を「もろもろの光の父」(ヤコ1:17)と呼んだが、偽ディオニュシオスと共にエリウゲナにとってすべての存在するものは光である。ごくかすかなまたたきにすぎない物体という光も「近寄り難い光」(1テモ6:16)を分有しているからである。

「実際、もし神である最高の善が自分の意志したすべてのものを造ったのであれば、それはそれ自体としては見ることができず近寄り難い光であるためにすべての感覚と知性とを超えているので、自分によって造られたものによっていわば一種のまたたきとして知性的被造物と理性的被造物の知識へ降りてくることができるよう造ったのである」<sup>48)</sup>。

万物は神をほのめかしている。木石も神という光源を証する光である。

「例えば、自然の末端に位置するものから最高の例を採ろう。そこにある石やここにある木は私にとって光である。もしあなたがどうしてかと尋ねるなら、理性はあれこれの石のことを考えて、私の精神を照らすさまざまなものが私に現れて来る、とあなたに答えるよう私を促す。まことに石はよく美しいものとして存在していること、固有の有り方で存在していること、類と種に関しては差異によってほかの事物の類と種と区別されること、或るものを一つのものとするところの自分の数に包括されていること、自分の位置をはみ出さないこと、自分の重さの性質に従って自分の場所に達しようとする、これらのことを私は悟る。この石において私がこれらのことやこれらに類したことを悟るとき、それらのものが私にとって光となり、私を照らす。私はそれらのものがどこから石に存在するようになるかを考察し始め、そしてそれらのものが、目に見える被造物であれ目に見えない被造物であれ、何らかの被造物を分有することによって石に自然本性的に内在しているのではないと考えるや直ちに理性に導かれて万物を超えて万物の原因に至る。この原因からこそすべてのものに場所と位置、数と種と類、善と美と本質とその他のすべての贈り物と賜物が分配されているのである。同様に、最高のものから下のものに至る、つまり知性的被造物から物体に至る、すべての被造物について、被造物と自分自身とを創造者の賛美に捧げる人々、自分の神を熱心に求める人々、存在するすべてのものにおいて神を見いだしたいと熱望する人々、存在するすべてのものを超えて神を称えることを愛する人々、自分の理性で深く思慮する人々、精神の直観で明瞭に洞察する人々、こういう人々にとって光は導き手となる。このことからこの世界という宇宙の建造物は最大の光であることになる。その光はちょうどたくさんのランプが集まるようにたくさんの部分が集った光であり、賢明な信仰者の心のなかで神の恵みと理性の力とが共に働くことにより、彼らに可知的事物の純粹な形相を明らかにして彼らがそれを鋭敏な精神で眺められるようにする光である」<sup>49)</sup>。

自然の事々物々においてそのように神の光を観て取ることができるならば、

最も高度に神の像である精神においては神の三一性の輝きを最も明瞭に観て取ることができる。

「それでは、直視して、曖昧さの闇をすべて追い払って鋭敏な精神で認識したまえ。人間の魂の諸々の運動において神の善性の実体的三性がそれを正しく直視する人々にいかに明瞭にいかに明白に示されるかを。またそれを敬虔に尋ね求める人々に対して自分の像に従って造った言わば澄み切った彼ら自身の鏡に自らを顕現するかを。そしてたとえそれがあらゆる被造物から隔絶していてすべての知性に知られないとしても、言わば知ることができ把握することができる像と類似性を通して知性の眼に言わば自らを現前するものとして示し、自分を映し出す鏡を自ら進んで清めるのであり、そのためにそれはその鏡に三つの実体における本質的に一なる善性として燦然と輝き出すのである。この一性と三性はそれ自体においてそれ自体として現れることはない。というのは、その輝きが余りにも無限であるために、それが自分の知の痕跡を自分の像に刻印するのでなければ、それはどのような知性にも捉えることができないからである」<sup>50)</sup>。

(付記 本論は平成 11 年度日本学術振興会交付科学研究費補助金による研究成果である。)

## 註

エリウゲナの著作『ペリピュセオン』のテキストは以下の通りで、PP と略記する。

*Periphyseon*. Liber primus (CCCM 161). É. Jeuneau (ed.), Turnhout 1996; Liber secundus (CCCM 162). É. Jeuneau (ed.), Turnhout 1997; Liber tertius (CCCM 163). É. Jeuneau (ed.), Turnhout 1999; Liber quartus (CCCM 163). É. Jeuneau (ed.), Turnhout 2000; Liber quintus (PL 122). J.-P. Migne (ed.), Paris 1853.

略号は以下の通りである。

CCCM = Corpus Christianorum, Continuatio Mediaevalis.

PL = Patrologiae Cursus Completus, Series Latina.

PG = Patrologiae Cursus Completus, Series Graeca.

なお、筆者の補いは [ ] に入れて示した。

拙論「エリウゲナにおける『像』の諸相」(『フィヒテ研究』第 8 号, 2000 年) は本

論と関連した内容を扱っているので参照していただければ幸いである。

- 1) *Omelia Iohannis Scoti*. É. Jauneau (ed.), *L'Homélie sur le Prologue de Jean* (Sources Chrétiennes 151), Paris 1969, XI 289 C.
- 2) Cf. Jean Trouillard (La Notion de "Théophanie" chez Érigène, *Manifestation et Révélation*, Paris 1976, p. 16.) はテオファニアの意味を三つに分類し, E. C. McCue, S. J. は六つに分類している (*Theophany: A Study of the Nature of God and his Manifestations from the Works of Joannes Scotus Eriugena, Ninth Century Irish*. Presented to the Graduate School of St. Louis University in partial fulfillment for the Degree of Doctor of Philosophy. 1933, pp. 180-181.).
- 3) イエス・キリストはそれ自体としては現れない神の受肉 (incarnatio) あるいは人間化 (inhumanatio) として一種のテオファニアと理解される。
- 4) *PP* III 633 A.
- 5) プラトンの弁証法はプロティノスにおいて大きな発展を見, さらに特に後期新プラトン主義者プロクロスによってより精緻な方法論に仕上げられたが, エリウゲナの弁証法はとりわけ偽ディオニュシオスに媒介されたこの後期新プラトン主義の弁証法の成果を受け継ぐものである。W. Beierwaltes, *Proklos. Grundzüge seiner Metaphysik*, Frankfurt am Main 2. Aufl. 1979, S. 240 ff. なおエリウゲナの弁証法に関しては拙論「弁証法の革新——エリウゲナにおける「自然」あるいは「普遍」の弁証法」『中世思想研究』第 35 号, 1993 年, pp. 45-72 を参照。
- 6) *PP* I 522 B.
- 7) エリウゲナの「無」に関しては以下を参照。W. Teasdale, "Nihil" as the Name of God in John Scotus Eriugena, *Cistercian Studies* 19, 1984, pp. 232-247; D. F. Duclow, Divine Nothingness and Self-Creation in John Scotus Eriugena, *The Journal of Religion* 57, 1977, pp. 109-123; D. Moran, Chap. 11. The meaning of non-being, *The philosophy of John Scottus Eriugena. A Study of Idealism in the Middle Ages*, Cambridge 1989, pp. 212-240; W. Beierwaltes, *Eriugena. Grundzüge seines Denkens*, Frankfurt am Main 1994, 特に SS. 89, 121-124, 191-192. (以下本書は *Eriugena* と略す)
- 8) *Expositiones in ierarchiam coelestem*, J. Barbet (ed.), Turnhout 1975 (以下 *Exp.* と略す), IV 76; *PP* III 680 A, 681 A. Cf. *PP* III 634 B, 645 A, 663 C, IV 825 C. Cf. W. Beierwaltes, *Eriugena*, S. 122.
- 9) *Exp.* IV 81-82. Cf. W. Beierwaltes, *Eriugena*. S. 123.
- 10) *PP* I 517 B. Cf. *PP* II 586 C.
- 11) *PP* I 517 C: Est enim ipse [deus] similitum similitudo et dissimilitudo dissimilium, oppositorum oppositio, contrarioum contrarietas. Heac enim omnia pulchra ineffabilique armonia in unam concordiam colligit atque componit. これらに込

められた思索はクザーヌスの *coincidentia oppositorum* の一源泉となった。この点については W. Beierwaltes, *Eriugena*, S. 189 f. 271 ff. を参照。

- 12) 拙論「エリウゲナにおける『超神学』と名づけられるもの」『文化と哲学』第7号, 1988年, pp. 32-51 を参照。
- 13) PP I 441 B, 442 B.
- 14) PP I 452 A で初めて「神の本性が創造される」ことが「聖なる教父たちの書物にしばしば見いだされる」ことが指摘され, PP III 633 A, 650C などですのように主張する教父として偽ディオニュシオスの名前が挙げられている。PP III 682 A 以下でこの問題に関してエリウゲナが取り上げている偽ディオニュシオスのテキストには「神の本性が創造される」ということが端的な形で述べられている文は見あたらないが, 偽ディオニュシオスには例えば『神名論』では「善の原理は万物に現存する」(III 1, 680 A), 「万物の彼方にある神の善性が最も高く最も高貴である存在者から最低のものに至るまであまねく及ぶ」(IV 4, 697 C), 「先存在者は万物の原因であるがゆえに万物なのである」(V 8, 824 A), 「神は万物において万物である」(VII 3, 872 A), 「神は自らを万物に与える」(XI 2, 952 A), 「万物の原因であるものは万物に充ち満ちている」(XII 4, 972 A), 「神は一切のものである」(XIII 2, 977 C) などがあリ, また『天上位階論』では「万物の存在は, 万物を超えている神性である」(IV 1, 177 D) などの神の内在性を含意する表現がある。(『神名論』の訳は熊田陽一郎訳による。)
- 15) PP I 454 A.
- 16) PP I 516 C.
- 17) 神の自己創造については拙論「エリウゲナにおける無なる神の自己創造」『山梨大学教育学部研究報告』第48号, 1997年, pp. 1-9. を参照。
- 18) PP I 452 C.
- 19) PP I 452 C.
- 20) PP I 453 A.
- 21) PP I 453 A.
- 22) PP III 677 B.
- 23) PP I 454 A.
- 24) PP III 650 D: Deus itaque omnia est et omnia deus! Quod monstruosum aestimabitur... (神は万物であり, 万物は神であるだとは! それは奇怪なことだと思われよう。)
- 25) PP I 454 A.
- 26) W. Beierwaltes, *Eriugena* S. 129: 「神が自分において創造されたものを通して自分自身を創造するということは神が他者の創造原理として自分自身を実現することを意味している」という解釈は正鵠を得ていると思う。
- 27) PP I 455 A. *substitutio* という語の意味については拙論「エリウゲナにおける sub-

- stitutio と subiectum」『山梨大学教育学部研究報告』第 44 号, 1993 年, pp. 115-122. を参照.
- 28) Cf. *Confessiones* XI, 5, 7.
- 29) *PP* III 683 B.
- 30) *PP* I 518 AB.
- 31) *PP* I 455 B, III 689 A-C.
- 32) *PP* I 454 A. ここに言及された人間の魂における御言葉の誕生の思想はマクシモスを継承するものである。この思想は後にマイスター・エックハルトで再現するが、そのラテンの源泉はエリウゲナであろう。
- 33) この問題に関しては拙論「エリウゲナにおけるテオファニアの生成」『山梨大学教育人間科学部紀要』第 1 巻 2 号, 2000 年, pp. 174-182, 特に pp. 177-180 を参照。
- 34) *PP* I 449 AB. Cf. Maximus Confessor, *I Ambigua*, PG 91, 1084 C, 1113 B, 1385 BC.
- 35) この「下降」とは御言葉の受肉 (incarnatio) のことではなく、被造物の神化 (*θέωσις*, deificatio) によって起こる事態を言う。Cf. *PP* I 449 B.
- 36) *PP* I p. 54 の I. P. Sheldon-Williams の欄外註によればこれの文字通りのテキストはアウグスティヌスには見いだされないようである。Cf. *De beata uita* XXXIV.
- 37) *PP* I 449 B.
- 38) *PP* I 449 C.
- 39) 「徳」が人間本性に生得的なものではないばかりか、たんに人間の本性的努力によって得られるものでもなく、むしろ人間の努力の上に神から与えられるものと見られている点は注目すべきだと思われる。
- 40) *PP* I 449 C.
- 41) *PP* I 449 D.
- 42) *PP* III 681 A.
- 43) *PP* III 633 CD.
- 44) *PP* I 453 B.
- 45) 「固有の有り方」は *analogia* の訳語である。エリウゲナのこの意味の *analogia* 概念は偽ディオニュシオスに由来する。拙論「エリウゲナの初期から『ベリビュセオン』までの著作における *analogia*」『山梨大学教育学部研究報告』第 42 号, 1992 年, pp. 83-95 を参照。
- 46) *Exp.* II 717-725.
- 47) *PP* III 689 C.
- 48) *Exp.* I 94-101.
- 49) *Exp.* I 108-134.
- 50) *PP* II 579 AB.